「真山さん…やめて、やっちゃダメだ…」

腕を吊り松葉杖をついた殉は、殆どミイラ男のような姿で傍らの柴田刑事に支えられていた。

「色々と面白い話を聞かせてもらったぜ。誘拐、傷害、児童虐待。所轄の連中もおっつけやって来る、観念しなネエチャン」

柴田が伝法な口調で言い放つ。

恵美子の手から鋏が落ちると、眉間で止まっている真山の拳を擦り抜けるように、碧を抱えたままズルズルとへたり込んだ。
拳を降ろした真山が、恵美子の腕の中から碧を引き離し抱き上げた。
殉の感じた彼の気配は何処か悲し気であった。

「あんたが北山の相棒か。野郎にゃいい情報をもらったぜ、礼をいわなきゃな。何処にいる？」
「刑事ですか？　あなたは」
「××署の柴田だ。ま、今は休暇中だがな」
「北さんは、さらわれた加夏子ちゃんを助けに行きましたよ。彼女の居場所はこの女が知っている筈です」

碧を横抱きにしたまま、真山は二人の前まで歩いてきた。

「無茶したな、殉くん。寝てなきゃ駄目じゃないか」
「胸騒ぎが止まらなくて。僕を訊ねてきた柴田さんに御願いしたんです」
「まぁいいさ。この子を連れて病院に戻りなさい。僕はまだやる事がある」

殉に告げると、真山は柴田へと向き直った。

「この子達を頼みます。あの二人は…警察に知られてしまっては引き渡さざるを得ません。不本意ですが」
「アンタ北山の野郎と違って話が出来るらしいな。まっ、こういう事はお上に任せておきな」

歪んだ笑いを浮かべた柴田が答えた。

碧をそっと床に横たえた真山は、呆然と座り込む恵美子に声を掛けた。

「君が雇った連中のアジトは何処だ？」
「…島…瀬戸内の…母が知ってる…」

力無く恵美子が呟いた。

「ありがとう」

そう言うと、真山はすっと立ち上がり部屋の出口へとそのまま歩き去ろうとした。

「真山さん」

殉が呼び止めた。

「なんだ」
「兄と会ったんですね。聞こえたんです、『声』が」

隣の柴田がぎろりと殉を睨んだ。

「隠せないんですね、闘っている時は。いろんな『声』が聞こえましたよ」
「…そうか…」

帰ったら話そう。
そう言って真山は背を向けた。

◇

残りはあと１５ｍもない筈であったが、暗闇の崖は永遠に奈落へと続いているようであった。

降りれば降りる程、傾斜は急になってきていた。
鼻をつままれても判らぬ程の闇が手がかり一つ、足がかり一つまで隠している。
僅かに残されたザイルの残骸もこれでは何の役にも立たなかった

北山の荒い息づかいは背中の加夏子まで上下させていた。

「北山さん」
「…こえ…かけんな…」

北山は、今はもう落ちぬようにへばり付いているのが精一杯であった。

「こりゃ…ヤバいぜ…」
「北山さん！　ガンバって！！」
「んなところで…くたばって…たまる…！？」

焦って出した足が岩角を捉えられず、ズルズルと二人の身体が絶壁を滑りだした。

「きゃぁぁぁ～！！」

うおおぉぉ～るせぇぞくらぁぁぁ～！！！

北山は両手の指を岩肌に叩きつけ、ガリガリと流れる壁面に食い込ませた。
顔面も押しつける。がきっという音と共に落下が止まった。

きつく目を閉じてしがみついていた加夏子は、恐るおそる目を開けてみた。
止まっている。奇跡のようだった。

「き…た…やま…さん…？」
「…ふぁんら」

北山は突き出た岩に噛みついていた。

「ほぇたへ…へへ…ほうは、ふへぇはほぅ」
「何いってるかわかんなぃよぅ」

言いながら加夏子は、首に回していた手を上に伸ばして岩肌を探った。
指先に触れた突起をつかみ精一杯身体を持ち上げる。

「今のうちにどっかつかんで、早く！」

少しの間ガサガサと手がかりを探っていた北山は、やがてしっかりとホールドを固め顔を起こした。

「ってて、チクショウ、歯が折れちまった」
「大丈夫？　痛い？」
「いいオトコが台無しだぜ」
「よかった、大丈夫みたいね」
「あのなぁ…」

擦り傷だらけの顔をしかめながら北山は下を見た。
かすかだが岩場が見える。

「下まであと６～７ｍってとこか」
「まだそんなにあるんだ…」
「この下は真っ直ぐに落ち込んでる。これ以上は降りられねぇな」
「…」
「いいか、よく聞け。前に手をまわして、ベルトをほどけ」
「えっ？」
「やるんだ、俺を信じろ」

ベルトが解けた刹那、北山は身を捻って加夏子を抱くと岩壁を蹴った。
二人の身体が虚空に吸い込まれていった。

◇

しばらく気を失っていたようだった。
身体のあちこちがズキズキと痛んだ。すり傷に打撲、きっと服も大変な事になってるだろう。

そうだ、ブラウスやぶいちゃったんだ
やだ、ジャンパーだけなんて

なんでやぶいちゃったんだっけ？

あれ？　なんで？

ここどこ？

……

……

！？

あさってのほうを彷徨っていた思考が焦点を結び、加夏子はがばっと跳ね起きた。
身体じゅうを触りまくる。
痛いことは痛いが、特に大きな怪我はしていないようだった。

「そうだ、北山さんが…北山さんっ！」

身を捩って辺りを見回すと、すぐ近くに倒れている人影がひとつ。
夢中になって這い寄り、横向きに倒れ込んでいる身体を力一杯揺さぶった。

「北山さん！　きたやまさんっ！！」
「……」
「しっかりして！　目ぇ開けて！！」
「……ぎゃあぎゃあうるせぇなぁ、生きてるよ、ちゃんと……」

物憂げに仰向けになると北山がゆっくり起きあがった。だがすぐに顔を歪める。

「生きてた、よかった、アタシてっきり死んじゃったんじゃないかって」
「そんなに殺したいか。嫌われてるな俺は」
「だって極ワルおやじじゃん」

半べそをかきながら悪態を言う加夏子の頭をがしがしと撫で、北山は精一杯笑ってみせた。

「よく助かったね、わたしたち」
「クッション様に感謝しろよ」

冗談を口にしてはみたが、北山は内心、冷や汗を流していた。

彼の右足は奇妙な角度で折れ曲がっていた。